

戦後70年におもう

竹本 成徳（兵庫県ユニセフ協会顧問・コープこうべ元理事長）

親子で平和を考える

核兵器不拡散条約（NPT）2015年再検討会議が4月27日から5月22日にかけてニューヨーク国連本部で行われました。私が昭和20年8月6日に体験したことを私自身の「ことば」で語った『さいごのトマト』を日生協の職員がボランティアで英訳してくれ、再検討会議に持って行ってくれました。これは力作で非常にうれしく思います。

『さいごのトマト』は生協組合員のお母さん（またはお父さん）と子どもたち、親子で読んでほしいと強く願って書いた本です。生協が生協たるゆえんの強さの根幹は家族や親子です。平和の問題を考えるとき生協の「虹のひろば」に参加された親子が、何十年も経ってから、特にお母さん方が「あの時、子どもたちと一緒に親子平和の旅に行けてよかった」、「虹のひろばに参加できてよかった」と言ってくれます。

こうした経験は、子どもの、そして親の人生にとってものすごくプラスに働くと思っています。また、人の心を読みとる力を育て、子どもなりに得たその時代の感動経験というものは、本人の人格や将来を形成していく上で非常に大切です。

子ども本人も学業を終えて成人になる頃に、「あの時、お父さんお母さんと一緒に、広島や長崎、沖縄に『平和の旅』に行けてよかったです」ということを、10人中10人が間違いなく言ってくれます。私はこれが、戦争を知らない世代が増えていくなかで、平和の原点だと考えています。子どもと一緒に参加し経験するという点について、生協ほど強いものはありません。

奇跡的に助かった命

コープこうべの理事長に就任した平成3年に広島赤十字・原爆病院から招待を受け、訪問しました。コープこうべでは、後遺症に苦しむ被爆者治療支援のために昭和60年から広島赤十字・原爆病院へ、昭和62年からは長崎の日本赤十字社長崎原爆病院へ、組合員による募金『平和のカンパ』を届ける活動を行っているからです。

院長、副院長、看護師長の3人に迎えていただき、懇談をしました。そのときに私自身が被爆者であること、そしてそこから奇跡的に生き残ったことを話しました。訪問したのは土曜日の午後でしたから診療は終わっていて、病院の中は比較的静かな環境でした。副院長先生のご案内で、原爆症で入院・加療中の患者さんをお見舞いしました。鉄筋コンクリートの病棟は窓の外の太陽の照り返しが強い場所に小さな盆栽が置かれており、病床から緑に慰められるような計らいがされていました。原爆症で毎日を闘っておられる患者さんに対する思いやりから、このようなことがされたんだなあと、非常にうれしく思いました。

病院の地下に案内されると、そこには戦争当時の広島市街地図が貼ってありました。爆心地を中心にして、10メートルおきに円周が描かれているもので、地図上には赤、黄、青のマチ針がプロットしてあります。赤のマチ針は死を意味し、当然ですが爆心地に近いほど赤いマチ針がずいぶん目につきます。副院長先生は私に、「竹本さん、貴方はここ、ちょうど広島市役所の建物の西側の植え込みのここ（で被爆したん）や

な。これをご覧なさい、ちょうど（爆心地から）1000メートルです。竹本さん、今、この1キロ圏内で生存している率は1%なんです。戦後こうして年を重ねてきて、今日現在で生存している率は1%です」と言われました。

私はどういう状況で奇跡的に生き残ったのかということについてずっと問題意識を持っていましたが、正確なことはわかりませんでした。副院長先生の話の聞き、「これはすごいことやな、これは大事なことを先生から聞いたな。自分の力だけではこの1%に入るのは非常に難しいだろう」と思いました。その時に私に与えられた責任といえますか、使命感に襲われました。生協の現役を退く時には、残る余生をこの原爆の事実を次の世代にお伝えしていく義務があるということをひそかに心に誓いました。

人類共通の財産

最後に特別に案内してもらったのは屋上にある簡易な倉庫でした。中に入ると、そこにぎっしり鉄のラック（棚）がしつらえてあり、この病院で亡くなった被爆患者2850人の内臓が立錐の余地もなく安置されていたのです。一つひとつに死亡年月日、年齢、そして一読できないように配慮された氏名のプレートが貼ってあります。

副院長先生が私に「竹本さん、私たちは研究材料としてこの1片を使わせていただく時には、本当に拝んで拝んで、大事に使わせていただいています。これは人類共通の、極めて大切な資産なんです。人類共有の、ここが大事なところ。これを作ることは未来永劫にできません。また作ってはなりません」と言われました。私も「先生、その通りです。未来永劫に作ることが再びあってはなりません。核戦争は二度とあってはなりません」と言って、2人は無

言の御霊2850体としばし瞑想の中におりました。しばらく無言の時間が過ぎ、「先生、ありがとうございます。核を発見した人類が、核によって滅ぶということがあってはなりません。今日はありがとうございます」と言って病院をあとにしました。

“命と自由”を奪う戦争

人間の尊厳とは一体何だろうかと考える時、「命と自由」だと思ふのです。人間の尊厳というのは、まず命だと。そして人間らしく生きていくという意味で、大事にされなければならないのは自由です。いくら命があっても、束縛され自由がない社会というのは、人間として好ましい社会ではありません。そして戦争が一度始まれば、ふたつとも容易に潰されていきます。これは、我々が人類の歴史から容易に学ぶことができると思います。だから、平和でなければならない。命と自由が尊重されるためには、戦争したらいかん、平和でなきゃならんと考えるわけです。

平和は待っていれば与えられるものではありませんし、願っていれば叶えられるものでもありません。平和はつくっていくもの、築き上げていくものだと思います。だから自由を侵すような、平和を脅かすようなものが現れた時、私たちは目をつぶらないことが大事なんだと思います。そして戦争をせずに、ものごとを解決する。国益の相克といった問題は簡単に解決するものではなく、長期間にわたり残っていくと思います。しかし、それを戦争や暴力という手段でなしに解決していく英知を持っているのが我々人間だ、という確信を持っていきたいという気持ちでいます。

残されたわずかな命ですが、命ある限り、ひとりでも多くの次の世代へ伝えていきたいという気持ちでいます。